

# 宮沢賢治詩の現代語解釈 その一

情報系一研究者の考察

大久保 等

要約 宮沢賢治の詩の解説や一つの詩の中の部分的解釈は、多数の専門家によって試みられている。しかし、一つの詩の全体を通して現代語解釈は今まで見つけることができなかった。今回、宮沢賢治の詩の代表作の一つ『序』という詩について、幾つかの解説書を参考にして、また一部に筆者による具体的な説明を付け加えて詩全体の現代語解釈を試みた。この中で、宮沢賢治は「生きている私という生命現象は、この世界の法則として、過去から仮定されていた現象である。その世界に、私は『心象スケッチ』という手法で書き記した詩を残して行く。その私が書き残したものは、厳密には、私が主張したい通りの正しい内容で他の人に伝わることはない。私と他の人には、『共通認識しか共有できない』という問題が存在する。いつかこの『共通認識しか共有できない』という問題は四次元研究の中で解明されるだろう」と云っている。

## 一 はじめに

宮沢賢治の詩は、地質学、鉱物学、植物学、天文学、気象学などの自然科学用語の他に、仏教用語（梵語）、外国語（エスペラント語風の用語など）が多用されており、一般に難解であると云われる。その為、宮沢賢治の童話作品は広く愛読されており、その仏教的、利他的な生き方や、宇宙的感觉が多くの日

本人から好感と興味を持たれているにも関わらず、詩作品に関しては、宮沢賢治研究者などごく少数の人を除いては「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」、「永訣の朝」など限られた幾つかの詩以外には興味を持たれていないのではないかと考える。

このような状況において、宮沢賢治の詩を一般の人にも分かるように現代語解釈することは、意義のある事だと考えた。芸術作品について、「芸術作品（筆者は、強い印象を与え、また深い印象を残す一部の詩は芸術作品に含めて良いと考え

る)を解説してはいけない。芸術とは、その作品と向き合って各人の感性で感じ取るものだからだ」と云う芸術関係者は多い。しかしそれは、芸術を鑑賞する素養を備えた人(基礎を学んだ人)が、同じく芸術鑑賞の素養を身に付けた人や芸術を志す人に対して云える話であって、芸術を鑑賞する基礎を学んでいない一般人には受け入れがたいものだと考える(ここで云う「一般人」とは、普通高校の進学過程を卒業した教育歴の社会人を想定して、仮に一般人と呼ぶことにする)。源氏物語や枕草子の現代語訳があるのは、現代人にも平安時代の文学が分かるように解説するために存在する。その意味で、宮沢賢治の一部の詩にも現代語解釈が必要である。

宮沢賢治の詩の解説や一つの詩の中の部分的解釈は、多数の専門家によって試みられている。しかし、専門的になり過ぎて分かり難いと常々感じてきた。また、一つの詩の全体を通した現代語解釈は今まで見つけることができなかった。

今回、宮沢賢治の詩の代表作の一つ『序』という詩について、幾つかの解説書を参考にして、また一部に筆者による具体的な説明を付け加えて詩全体の現代語解釈を試みた。

筆者の現代語解釈について、他の研究者が異なる解釈を提示されることは、大変望ましいことである。そのことによって、宮沢賢治詩の正しい解釈が広く一般に普及していくことを望んでいる。

## 二 心象スケッチ「春と修羅」第一集、「序」の現代語解釈

宮沢賢治は、心象スケッチと呼ぶ詩集「春と修羅」第一集の「はしがき」にあたる部分を「序」という詩で書いている。この「序」について、現代語解釈を試みたい。まず、詩の全文を掲載する。

### (一) 「序」の全文

わたくしといふ現象は  
仮定された有機交流電燈の  
ひとつの青い照明です  
(あらゆる透明な幽霊の複合体)  
風景やみんなといっしょに  
せはしくせはしく明滅しながら  
いかにもたしかにともりつづける  
因果交流電燈の  
ひとつの青い照明です  
(ひかりはたまち その電燈は失はれ)

これらは二十二箇月の  
過去とかんずる方角から  
紙と鋳質インクをつらね

(すべてわたくしと明滅し)

みんなが同時に感ずるもの)

ここまでちつづけられた

かげとひかりのひとくさりづつ

そのとほりの心象スケッチです

これらについて人や銀河や修羅や海胆<sup>うに</sup>は

宇宙塵<sup>しん</sup>を食べ または空気や塩水を呼吸しながら

それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが

それらも畢竟<sup>ひっきよう</sup>このひとつの風物です

ただたしかに記録されたこれらのけしきは

記録されたそのとほりのこのけしきで

それが虚無ならば虚無自身がこのとほりで

ある程度まではみんなに共通いたします

(すべてがわたくしの中のみんなであるやうに

みんなのおおののなかのすべてですから)

けれどもこれら新世代沖積世の

巨大に明るい時間の集積<sup>はす</sup>のなかで

正しくうつされた筈<sup>はず</sup>のこれらのことばが

わづかその一点にも均<sup>ひと</sup>しい明暗のうちに

(あるひは修羅の十億年)

すではやくもその組立や質を變じ

しかもわたくしも印刷者も

それを變らないとして感ずることは

傾向としてはあり得ます

けだしわれわれがわれわれの感官や

風景や人物をかんずるやうに

そしてただ共通に感ずるだけであるやうに

記録や歴史 あるひは地史といふものも

そのいろいろの論料<sup>デイク</sup>といつしよに

(因果の時空的制約のもとに)

われわれがかんじてゐるのに過ぎません

おそらくこれから二千年もたったころは

それ相当のちがつた地質学が流用され

相当した証拠もまた次々と過去から現出し

みんなは二千年ぐらゐ前には

青ぞらいつぱいの無色な孔雀が居たとおもひ

新進<sup>しんじん</sup>の大学士たちは氣圈のいちばんの上層

きらびやかな氷窒素のあたりから

すてきな化石を發掘したり

あるひは白亜紀砂岩の層面に

透明な人類の巨大な足跡<sup>あしあと</sup>を

發見するかもしれません

すべてこれらの命題は

心象や時間それ自身の性質として

第四次延長のなかで主張されます

大正十三年一月廿日<sup>はつか</sup>

## (二) 段落ごとの現代語解釈

以下、段落ごとに分けて現代語解釈を試みる。この段落分けは、新潮文庫「宮沢賢治詩集 草野心平編」(昭和四十四年四月十日発行)二百十一頁以降の「解説」を参考に行っている。

### (ア) 「私」について

わたくしといふ現象は

仮定された有機交流電燈の

ひとつの青い照明です

(あらゆる透明な幽霊の複合体)

風景やみんなといっしょに

せはしくせはしく明滅しながら

いかにもたしかにともりつづける

因果交流電燈の

ひとつの青い照明です

(ひかりはたもち その電燈は失はれ)

生きている「私<sup>わたくし</sup>」という現象を、昭和初期の無声映画のような画面に映し出してみれば、せわしく動き回る画面上の人物のようなものである。それは、「私」の生命としての現象が、この世界の法則として、過去から仮定されており、スイッチを押して点灯した、生命現象として青く光る電燈のようなものである(複雑な炭素化合物である有機物は、長い間、生体で合成される化合物と定義されてきた。宮沢賢治は、人工物である交流電燈がスイッチを押せば点灯する事が事前に仮定されているよ

うに、有機物である「私」という生命現象も、私に生命を与えた(私を超える存在である)この世界の法則の中で前々から仮定されていた、と云っている。それを「有機交流電燈」と表現したと解釈できる)。私が生きている生命現象は、映像の中ではその動きによって成立している訳だが、幽霊というものもまた視覚に映ずる動きであるならば、動きという観点からすれば、私自身もまた幽霊の複合体現象と云える。風景やみんなと一緒にせわしく活動しながら、いかにも確かに生命活動を行う、(過去から未来まで、総てのものには因果関係が働く、その過程の中で点灯した)一つの青く光る電燈のようなものである。いか私に死が訪れても、私の活動の結果としての作品群、電燈で言えば「ひかり」に当たるものは残って行くことになる。

### (イ) 「心象スケッチ」について

これらは二十二箇月の

過去とかんずる方角から

紙と鉛質インクをつらね

(すべてわたくしと明滅し

みんなが同時に感ずるもの)

ここまでのまちつづけられた

かげとひかりのひとくさりつづ

そのとほりの心象スケッチです

これらは、二十二ヶ月前から、紙に硬質インクで書き連ねたすべて私の心の中に想起したもの(そして私がこの世界の中の

一部であるならば、世界もまた私と同じように感じるもの)、ここまで保ち続けられた心の中に投影された影と光りの一こまづつ、そのとおりの心象スケッチである。

(ウ) 「私の記録」と「他の人」の認識について

これらについて人や銀河や修羅や海胆は宇宙塵を食べ または空気や塩水を呼吸しながらそれぞれ新鮮な本体論もかんがへませうがそれらも畢竟こころのひとつの風物ですただたしかに記録されたこれらのけしきは記録されたそのとほりのこのけしきで

それが虚無ならば虚無自身がこのとほりである程度まではみんなに共通いたします(すべてがわたくしの中のものなのであるやうに

みんなのおののなかのすべてですから)

これらの詩について、他の人や、銀河や修羅や海胆は、もしそれらが私達の理解し得ない形で生命活動を行っているとするならば(私たちは、時々「地球は生きている」という表現を使う。これは「生き物でない」地球を生き物に喩えた「擬人法」の文学的表現にあたる訳だが、しかし、私たちが学んだ生物学の定義を離れて、この地上に生活する中で、何かの機会に「地球は生きている」と感じる時がある。「地球」は、私たちが学んだ生物学の定義とは異なる形で、たぶん「生きている」のである。そのように、銀河や修羅も私たちの理解し得ない形で生

命活動を行っているとするとするならば)、それぞれの生命維持のための宇宙の塵を食物として食べ、または呼吸しながら、自分中心の生命論を考えるだろうが、それらも畢竟それらがそう思っているだけの心の一つの風景に過ぎない(例えば、私達北半球に住む人間は、地球の北半球が南半球に比べて宇宙軸の上側にあると考え勝ちであるが、実は宇宙には上も下もない訳だから、あの地球儀の上下の作り方は間違っているのである。それにも関わらず、私達北半球に住む人間はそう思い勝ちである。それと同じで人間中心の生命論も、私達がそう思っているだけのことなのである)。

ただ記録されたこれらの詩は、記録されたその通りのかたちでみんなに共通する。それは、私が周囲の景色を(本当はそうでないかもしれないのに、私なりに理解するより他には方法が無い訳だから)私なりに理解しているのと同じように、みんなも、みんなのそれぞれの認識の中で理解しているだけであり、総ての事柄についてそういう具合だから。(例えば「犬」という言葉を聞けば、私自身は自宅で飼っていた雑種の白い小型犬のことを想起するのだが、他の人は秋田犬やスピッツなどの違う種類の犬を想起するかもしれない。そのように「犬」という言葉で、四つ足の、あのいぬ科のけだものを想起するというふうに、ある程度までは共通認識を持つ訳だが、完全一致の認識は持てないことになる)

(エ) 「時間」の性質と「私」の認識について

けれどもこれら新世代沖積世の

巨大に明るい時間の集積のなかで

正しくうつされた筈のこれら<sup>はず</sup>のことはが  
わづかその一点にも均<sup>ひと</sup>しい明暗のうちに

(あるひは修羅の十億年)

すではやくもその組立や質を変じ

しかもわたくしも印刷者も

それを変らないとして感ずることは

傾向としてはあり得ます

しかし新世代沖積世という現代の、世界全体に太陽光線が明るく降り注ぎ、時間が蓄積されていく中で、正しく記録されたはずのこれらの言葉が、僅か一瞬にも等しい時間経過のうちに(それは修羅にとつては十億年に当たる時間経過なのかもしれないが)、太陽光線による変退色や空気による酸化を受けて、その組立や質を変じ(それらは何十年もすれば、記録された文字が読めない程度にまで浸食が進むというのに)、それにも関わらず、私や印刷者が変わらないと思つてしまふ傾向は、確かにあり得る。

(オ) 「因果の時空的制約」について

けだしわれわれがわれわれの感官や

風景や人物をかんずるやうに

そしてただ共通にかんずるだけであるやうに

記録や歴史 あるひは地史といふものも

そのいろいろの論料<sup>データ</sup>といっしょに

(因果の時空的制約のもとに)

われわれがかんじてゐるのに過ぎません

しかしそれだけではない。我々が感覚として感ずるものや、風景や人物を感じるように(食事する時、私たちは、事実として確かに歯で食物を噛み切っている。しかし歯医者で歯茎に麻醉を打たれた後、麻醉が切れる前に飲食すると、事実として歯で噛み切つていても、本当に歯で噛み切っているかどうか、自分でも覚束ないことがある。つまり、私たちは感覚器官があるから、実際にあると思つているが、感覚器官が麻痺してしまえば無いと同じ事になつてしまふ訳である。そのように、風景や人物も感覚として感じていただけなのである)、そしてただ共通に感じていただけであるように(上述した「犬」という言葉で、みんながいぬ科のけだものをただ共通に感じていただけであるように)、記録や歴史、あるいは地史というものも、その色々なデータと一緒に、原因と結果の因果関係の時間と空間の制約の中で、我々が感じていただけに過ぎない。

(カ) 「科学の発展」と「四次元研究」について

おそらくこれから二千年もたったころは

それ相当のちがった地質学が流用され

相当した証拠もまた次々と過去から現出し

みんなは二千年ぐらゐ前には

青ぞら<sup>しんしん</sup>いっぱい<sup>しんしん</sup>の無色な孔雀が居たとおもひ

新進の大学士たちは気圏のいちばんの上層



さらにやかな氷窒素のあたりから  
すてきな化石を発掘したり

あるひは白亜紀砂岩の層面に  
透明な人類の巨大な足跡<sup>あしあと</sup>を  
発見するかもしれません

すべてこれらの命題は

心象や時間それ自身の性質として

第四次延長のなかで主張されます

おそらくこれから二千年も経った頃には、それ相当の地質学が流用され(例えば現在、土壌に含まれる花粉分析の技術によって、今から二千年～五千年前の縄文、弥生人の食生活を言い当てようとする努力がなされているが、それと同じように)、みんなは現代に青空一杯の孔雀が居たと思い、気圏の一番の上層の氷窒素のあたりから(現代の人間活動によって蓄えられた、二酸化炭素やハロンガス等の)素敵な化石を発掘したり、白亜紀砂岩の層面に(現代の科学技術では検出不可能な)恐竜と共に生きていた人類の巨大な足跡の痕跡(その痕跡は、土壌分析によって発見される、人間の皮膚の発汗作用の特異性に基づく、土壌中の痕跡検査によって、その足の部分の大きさが特定されるかもしれない、そういう痕跡)を発見するかもしれない。

すべてこれらの命題(「何故、必然的にそうなるのか」という命題。命題は、意味に不明瞭なところがなくなくなる。理論—推論—仮説—モデル—命題—法則—原理—第一原理—公理—定理

—証明—反証の順で解明されて行く)は、「犬」という言葉でみんなが想起するものは同じもののなのに、しかしただ共通に感じているだけで、実はみんな個別のものを想起しており、共通に感じているだけだという心象の性質や、一瞬の時間経過で廻り全てがどんどん移り変わって行くのに、今暫くは変わらないだろうと捉えてしまう傾向は(しかもそれで、今暫くは確かにさほど問題にもならない程度の違いなのに、時間経過とともに徐々に無視できないまでに蓄積してしまう変化である、そういう時間の持つ性質は)、心象や時間それ自身が内包している問題であり、時間や空間、それに心象も含めた、この世界を全体として扱う四次元の問題として、今後の四次元研究の成果として解明され、主張されて行く、そういう問題である。

#### (キ) 全体的な要約

全体を通して乱暴に要約すれば、「生きている私という生命現象は、この世界の法則として、過去から仮定されていた現象である。その世界に、私は『心象スケッチ』という手法で書き記した詩を残して行く。その私が書き残したものは、厳密には、私が主張したい通りの正しい内容で他の人に伝わることはない。私と他の人には、『共通認識しか共有できない』という問題が存在する。いつかこの『共通認識しか共有できない』という問題は四次元研究の中で解明されるだろう」と云っている。

### 三 用語や文節の詳細解説

前節で述べた現代語解釈において、解釈が難しかった用語や文節の詳細解説を試みる。前節の現代語解釈においては、多分に疑問が残りながら、結果として前節のような一つの解釈を行ったものである。以下の解説は、他の宮沢賢治研究者の解説や解釈を参考にしているが、筆者なりの理解も含めている。

#### (ア) あらゆる透明な幽霊の複合体

生きている「私」という生命現象を、「あらゆる透明な幽霊の複合体」現象であるという理解に至ることは筆者には難しい。このことについて、宮沢賢治が、この後の段落にあるように、生命現象を感覚器官が感じているだけだと捉えていたとすると、この解釈は「私の感覚器官を刺激する様々な刺激の幽霊現象の複合体として(刺激の中には有用な刺激もあるし、私にとって無用な刺激もあり、それら全体としては幽霊現象の複合体と捉えることは可能であろう)、生きている現象が理解される」という解釈になる。

前節の現代語解釈では、「無声映画の映像の中では、生きている現象がその動きによって成立している訳だが、幽霊というものもまた視覚に映ずる動きであるならば、動きという観点からすれば、私自身もまた幽霊の複合体現象と云える」とした。

#### (イ) そのとほりの心象スケッチです

「心象」とは、沢山の研究者が指摘しているとおり、宮沢賢

治という個人の心に、外界との様々な接触の中で想起された、その時どきの印象や、心に投影された映像イメージを指すと思われる。それは、「青ぞらいつぱいの無色な孔雀」だったり、「透明な人類の巨大な足跡」だったりするわけである。「心象スケッチ」とは、その「心象」をそのまま描写したものを指すことになるが、彼は心に投影されたその時どきの「心象」の言葉を、より彼の思う真実の表現に近づけるために何度も推敲をしているため、現実としてそのままの描写ではなく、より宮沢賢治の思う真実に近い描写である。

#### (ウ) これらについて人や銀河や修羅や海胆は／宇宙塵を食べ

べ または空気や塩水を呼吸しながら／それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが

「銀河や修羅や海胆が、宇宙塵を食べ、または空気や塩水を呼吸して、それぞれ新鮮な本体論を考える」というのは、現代の生物学からすれば、異様に思える。しかし、「生き物」について、生物学で定義された「生き物」だけでなく、もっと広く「自律的に動いているもの」を「生き物」と考えれば、「銀河」や「修羅」や勿論「海胆」も「生き物」の一つに含めて良いと考えられる。私たちは文学における「擬人法」の情緒的表現を使って「地球は生きている」と表現するが、「自律的に動いている」ことに注目すれば、生物学の定義とは異なるもつと広い意味で、本当に「生きている」と考えられないだろうか。そしてそれらは、私たち人間が人間中心の世界観を持っているように、それぞれがこの世界の中心的存在としての世界観を持つて



いると考えられる。

前節の現代語解釈では、「銀河や修羅や海胆は、もしそれらが私達の理解し得ない形で生命活動を行っているとすれば、それぞれの生命維持のための宇宙の塵を食物として食べ、または呼吸しながら、自分中心の生命論を考えるだろう」とした。

(エ) 心象や時間それ自身の性質として／第四次延長のなかで主張されます

宮沢賢治の「第四次延長」とはどのようなものなのか、物理学で云う「四次元時空」とは多少異なるものを指していたのではないかと思われる。通常の物理学で「時間」は四次元時空の一要素として扱われるにしても、「心象」は四次元時空の要素として扱われることはない。よって、宮沢賢治の「四次元」とは、物理学で云う「四次元」をもっと広く解釈して、過去から未来まで、総てのものには因果関係が働き、その連続で世界が成り立っている、この世界そのものの研究と解釈すべきではないか、と考える。

## 参考文献

- (ア) 草野心平編『宮沢賢治詩集』新潮文庫 青三〇、一九六九年
- (イ) 梅原猛「修羅の世界を超えて」『文芸読本 宮沢賢治』河出書房新社、一九七七年、九二頁―一〇三頁
- (ウ) 板谷栄城『宮沢賢治の見た心象―田園の風と光の中から』NHKブックス五九一、一九九〇年
- (エ) 原子朗、他監修『宮沢賢治の世界』展 図録』朝日新聞社、一九九五年

前節の現代語解釈では、「心象や時間それ自身が内包している問題であり、時間や空間、それに心象も含めた、この世界を全体として扱う四次元の問題として、今後の四次元研究の成果として解明され、主張されて行く、そういう問題である」とした。

## 四 終わりに

今回、宮沢賢治の詩の代表作の一つ、『序』という「はしがき」の代わりに書かれた詩について、一つの詩全体の現代語解釈を試みた。

「二 (二) 段落」との現代語解釈」でも述べたように、宮沢賢治と筆者は、記録された言葉を通じて「ある程度までは共通認識を持つ訳だが、完全一致の認識は持てない」ため、宮沢賢治がこの『序』において何を主張したかったのか、今後とも他の研究者の方々の研究成果を参考にしながら考えていきたい。

(オ) 天沢退二郎編『宮沢賢治ハンドブック』新書館、一九九六年

(カ) 斉藤文一『宮沢賢治の世界 銀河系を意識して』国文社、二〇〇三年